國學院大學学術情報リポジトリ

〈鳴く虫〉・〈前栽掘り〉の興：平安物語研究のために

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 飯沼, 清子, Iinuma, Kiyoko
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000480

〈鳴く虫〉・〈前栽掘り〉の興

—平安物語研究のために—

飯沼清子

緒言

『小右記』治安三年（一〇二三）八月二十三日条に興味深い記事がある。

二十三日、甲寅、（前略）隨身等執松虫・鈴虫、放參堂之路邊叢中、其聲有興、

（引用は大日本古記録に拠る。以下同）

藤原実資が随身らに「松虫・鈴虫」を捕らせ、「堂」—新造の念誦堂に通じる路辺に放させたところ、虫の声が面白かった、というのである。実資はこの年六十七歳、正二位で、右大将を兼ねた右大臣であった。規定どおりであれば八人の随身がいたことになる。虫を捕ったのは全員なのか、そのうちの何人なのかはわからない。童なども加わっていたかもしれない。それにしても、この記述は何を意図したものであったのだろうか。

実資にとって念誦堂の建立は「宿念」（長和四年〈一〇一五〉五月二十二日条）であった。治安三年五月以降の記事よると、完成途上から公卿や僧侶がこれを見るために訪れている。[1] 実資

が精魂を傾けて建立した念誦堂の路辺の草むらから聞こえる虫の声は、読経の場に風雅を添えたであろう。なお、このことは作庭上の野筋とも関わる。[2]

さて、筆者はここで考える。「虫（音）」と「堂」との対比に見られる美意識のありようである。「堂」を建立したとして、実資にとっては念誦堂という人工物がいかに完璧であっても不十分であった。それを包みこむ〈景〉が具わってこそ、と彼は望んだのである。景（音）と建物との調和、すなわち〈自然〉と〈人工〉との調和の美である。それこそが最も目指された事態であった。実資はまさにその人工物と自然との調和を期したのではないか。ただし、この場合は、作られた自然（虫捕り・虫放ち）であったが。そして、それを捉えた表現が「其聲有興」であったと思うのである。

虫の鳴く声を聴くために、自邸の庭園に、念誦堂に、さらには帝の御前にさえ鳴く虫を連れてくる（後述）。虫がいる場に出かけて行くのではなく、虫を捕獲し、籠に入れ、耳を巡る楽しみのために奉仕させる。そして〈其聲有興〉といって楽しむ。また前栽掘りをして自分の意匠どおりに前栽を作って楽しむ。これは作庭という思想に繋がる。

さきに〈自然〉と〈人工〉との調和を目指した、と述べたが、天然自然にその調和がないなら、人為的に調和させればよいともいえ、平安貴族の美意識には二つの調和が存在したことになる。一つは両者の自然の帰結であり、他は以下の本論に述べる〈其聲有興〉の美の世界である。

一、虫を捕らえて放つ

虫を捕って放す、とはそもそも人間のどういう心の所産であろうか。まず伊勢、藤原公任の歌の検討から始めよう。

① 鈴虫とりて、前栽に放つとて

一四二　いづこにも草の枕をすゞむしはこゝを旅ともおもはざらなん

（『伊勢集』[3]）

一目瞭然の詞書である。歌意は「どこにいても草を枕にする鈴虫は、この庭を旅と思わず我家と思ってずっとここにいておくれ」[4]というものである。

〈鈴虫とりて、前栽に放つ〉とあるから、この鈴虫はもともと前栽にいた虫ではない。天然自然のありようではなく、設えられたそれである。それをしも作者は、連れてこられた「旅」

と思わないでほしい、と詠った。人の手によって誂えられた環境なのに、自然と思ってほしい、とのレトリックをもって、「作られた自然」を詠っていたのである。

② 故殿亡せさせ給ふて後、はなちたる鈴むしの年経て鳴ければ
九七　いかでかは音の絶えざらん鈴虫のうき世にふるはくるしき物を　（『公任集』[5]）

詞書の「故殿」は永延三年（九八九）六月二十六日に薨じた公任の父藤原頼忠[6]である。

「どうして鈴虫の声は歳月を経ても絶えないのだろう。憂き世を生きていくのは苦しいことだのに[7]」というこの歌を、竹鼻績は「鈴虫は頼忠が飼育していたもので、主人の亡くなった後に放たれたのであろうか」と述べている[8]。

「はなちたる鈴むし」は、時を経て自然に戻り、どこかに散り散りになってしまう。しかし「故殿」の思いがそのままに鈴虫の声となって今に鳴いている、ということだろう。その感動を「いかでかは音の絶えざらん」と表現した。時の経過に抗するのは容易ではなかろうに、というわけである。それを「うき世にふるはくるしき物を」と、人間が生きて行くことの困難に準えた。ここに「虫を捕って放つ」ことの喩が明らかになる。「人為的な自然」、「作られた自然」を希有にも…、と稀少な実例として強調したのである。

藤原（中御門）宗忠の日記『中右記』嘉保二年（一〇九五）八月十二日条を引く。

（堀河天皇の時代。以下、字体は引用書によったが私に改めた箇所がある。／は記事の区切りを示す）

十二日、午時着束帯參大殿東三條、暫祗候間、及未尅有内召、則參仕、／今日貫首尚書以下出嵯峨野、取虫可備天覽者、事出楚忽、興入周遊、或從里亭馳參、或從禁中競出、申時許牽左右馬寮御馬幷放野馬騎用之、／頭弁師頼朝臣・予・前兵衛佐長忠朝臣・權中將顯實朝臣・藏人少納言成宗、已上直衣、四位侍從宗信（藤原）朝臣・藏人弁時範（平）・藏人木工助明國（源）、已上衣冠、右少將宗輔、侍從家政（藤原）・師重（源）、兵衛佐師時（源）、藏人左衛門尉宗佐（藤原）、已上布衣、藏人式部丞隆重（藤原）・藏人仲正（源）、青色／
晩頭向嵯峨野、且以眺望、且是尋虫、取虫入小籠相具、月

前歸參、于時御中宮御方、進虫籠、還着殿上有小淵醉、人〻朗詠、興入魔歟、僉議出題云、野外尋虫、序題藏人弁者、及深更參宮御方講和歌、藏人少納言（源成宗）爲講師、人〻歌講畢後、從簾中被出歌二首、書萩薄様、誠以優美也、及夜半事畢、（以下略）

［十二日、午時束帯を着し大殿の東三條に参る。暫く祗候せる間、未尅に及び内より召し有り。則ち参り仕る。／今日貫首尚書以下㋐嵯峨野に出で、虫を取り天覧に備ふべし、てへり。事楚忽に出づ。興じて周遊に入る。或は里亭より馳せ参り、或は禁中より競ひ出づ。申の時ばかり左右馬寮の御馬并びに野に放てる馬を牽き騎用せり。／頭弁師頼朝臣・予・前兵衛佐長忠朝臣・権中将顕実朝臣・蔵人少納言成宗、已上直衣、四位侍従宗信朝臣・蔵人弁時範・蔵人木工助明国、已上衣冠、右少将宗輔、侍従家政・師重、兵衛佐師時、蔵人左衛門尉宗佐、已上布衣、蔵人式部丞隆重・蔵人仲正、青色／晩頭嵯峨野に向かふ。㋑且つ以て眺望し、且つ是れ虫を尋ぬ。虫を取りて小籠に入れ相具し、月前に帰参せり。時に中宮の御方に御す。虫籠を進る。㋒還り着くに殿上にて小淵醉有り。人々朗詠す。興は魔に入るか。出題を僉議して云はく、「野外に虫を尋ぬ」と。序・題は蔵人弁てへり。深更に及び宮の御方に参り和歌を講ず。蔵人少納言を講師と為す。人々の歌講じ畢りて後、簾中より歌二首を出ださる。萩の薄様に書けり。誠に以て優美なり。夜半に及び事畢りぬ。（以下略）］

この日、宗忠は大殿の東三條邸に参上したが、召しによって内裏へ参上した。そこで聞いたことは、貫首（かんず）尚書（頭の弁源師頼）以下、嵯峨野に出向いて虫を取り天覧に供す旨であった。次いで「事楚忽に出づ」とあるから急に思い立ってのこととわかる（傍線㋐）。

騎馬で嵯峨野に向かった一行は景色を眺め、虫を捕り、虫籠に入れ携行して帰参した（傍線㋑）。その後御覧に供すべく虫を進上した。時に天皇は中宮（後三條天皇第四皇女、篤子内親王）の御方に在った。殿上での小淵醉（小宴会）、和歌の朗詠が行われ、その熱中の様子は「興は魔に入るか」（傍線㋒）と記されるほどであった。

人々は「野外に虫を尋ぬ」という題で歌を詠んだ。蔵人弁、平時範が序者兼題者、蔵人少納言源成宗が講師をつとめた。深更に及んで和歌が講ぜられ、すべて終わったのは夜半であっ

た。[9] ここには宮廷における嵯峨野での虫捕りの様が記される。臨時の為事であったが、「天覧に備ふ」とあり、「野外に虫を尋ぬ」の題で和歌が詠まれ、「簾中より」歌二首も出された。放虫の記述はなく〈其聲有興〉の美の世界とは異なるが、蛍狩り宜しく、自然に分け入り、その〈体感〉と〈獲物獲得〉の興奮を味わう態のものと察せられる。

次の例は近衛家実（治承三年〈一一七九〉～仁治三年〈一二四二〉）の日記『猪熊（隈）関白記』建仁二年（一二〇二）八月十四日条である。

十四日、乙酉、
天晴、
前栽之中松虫・鈴虫等放之、其聲有興、
［前栽の中に松虫・鈴虫等を放つ。その声興有り］

短い記述であるが、家実が前栽に放した虫の声を心地よく聞いたことがわかる。前栽に松虫・鈴虫を放った、とあり、人工的な営為であることは、緒言に引いた『小右記』の用例に類同する。ただ記録の表現は限定的で、この一条からことの逐一、全貌を描ききることはさし控えるべきかと思う。いずれにしてもその謂心は自然に分け入ることで感得される美意識ではなく、自然を造型する点にポイントがある。それこそが実資・家実の〈其聲有興〉に向かうレトリックに込めた内実であった。それを読み落とすなら、この記述の存在意義は著しく減退してしまおう。

二、庭を「野に造らせる」前栽掘り

「興」を求めるための努力を惜しまなかった貴族たちは、虫の声の「興」を感じるために環境を整えた。人の手による自然の造形・改変であり、「作庭」に連なるであろう。それが草木を掘り採る「前栽掘り」である。これについては竹鼻績が『公任集』の一〇四番歌の詞書

中宮の御前に前栽植（うゑ）させ給ふ日、秋の草をうふ[7]といふ題を

の注釈で「当時は、前栽を掘るために秋の野に出かけた」として古記録から例を引いており、「掘る」以外にも「穿前栽」（前栽を穿つ）と表す例（『権記』寛仁元年八月二十一日条）もあ

げている。[10]（一〇四番歌と詞書については注（16）②参照）。また飯塚ひろみが歌語「女郎花」に注目し、女郎花が野から前栽に移される「前栽掘り」が、どのように行われたかについて史実に例を求めて述べている[11]ので、本稿では古記録に見える例について多くは触れないが、長和元年（一〇一二）九月六日に催された「前栽掘り」を『御堂関白記』と『小右記』から紹介しておきたい。

ⓐ『御堂関白記』

六日、辛未、時■小雨降、殿上人出嵯峨、掘前栽、獻皇太后宮、其間參入、〻夜退出、

［六日、辛未、時〻小雨降る。殿上人嵯峨に出でて前栽を掘る。皇太后宮に献ず。其の間参入す。夜に入りて退出す］

ⓑ『小右記』　同日条

六日、辛未、今日雲上人〻向嵯峨野、掘前栽、可殖（マヽ）皇太后宮之由、一日左府於彼宮［被］命云〻、仍資平隨彼是催、調餌袋破子、早旦參枇杷殿、凉（諒）闇間無便事也、（以下略）

［六日、辛未、今日雲上の人々嵯峨野に向かひ、前栽を掘る。皇太后宮に植うべき由、一日左府彼の宮に於いて命せらると云々、仍りて資平彼是催すに随ひ、餌袋破子を調じ、早旦枇杷殿に参る。諒闇の間便無き事なり。（以下略）］

殿上人が嵯峨野の前栽を掘り皇太后宮（藤原彰子）に奉ったことが記されている。彰子は七月八日、上東門邸より御所である枇杷殿に還御していた。そこに掘り採った前栽を献じたのである。「餌袋破子」を調えて枇杷殿に持参した資平は実資の兄、懐平の子であり実資の猶子である。「諒闇」とあるのは前年の寛弘八年（一〇一一）十月、冷泉上皇が崩御していたからであり、三条天皇（冷泉の第二皇子）は諒闇中であった。寛弘八年六月には一条法皇が崩御したが、彰子の喪はあけていることから左府道長が彰子のために発案したのだろう。三条天皇の厚い信任を受けている実資はこの「前栽掘り」に不快な思いを抱いた。「便無き事―けしからぬこと」がそれを語っている。古記録の事例にはその時々の社会的な背景が写されていて興味深い。[12]

さて「前栽掘り」は『源氏物語』にも描かれている。

①　（源氏）「（前略）狭き垣根の内なりとも、そのをりの心見知るばかり、春の花の木をも植ゑわたし、秋の草をも掘り

移して、いたづらなる野辺の虫をも住ませて、人に御覧ぜさせむと思ひたまふるを、いづ方にか御心寄せはべるべからむ」と聞こえたまふに　（「薄雲」巻）

（本文は小学館・新編日本古典文学全集に拠る。以下同じ）

二条院に退下した斎宮女御（秋好中宮）を源氏が訪れた。源氏の口から「前栽掘り」と「虫を放つ」ことが語られている。

②　御前（東北の町の西の対―玉鬘の居所）に、乱れがはしき前栽なども植ゑさせたまはず、撫子の色をととのへたる、唐の、大和の、籬いとなつかしく結ひなして、咲き乱れたる夕映えいみじく見ゆ。　（「常夏」巻）

夏のある日、東の釣殿で涼をとったあと、源氏は玉鬘の居所を訪れる。その庭には唐撫子、大和撫子だけが植えてあった。傍線部は、草木をとりまぜて「掘り」植えることが前栽の有様としては一般的であることを示している。

③　中宮の御前に、秋の花を植ゑさせたまへること、常の年よりも見どころ多く、色種を尽くして、（中略）造りわたせる野辺の色を見るに、はた春の山も忘られて、涼しうおもしろく、心もあくがるるやうなり。　（「野分」巻）

秋の草木が植えられた六条院の秋好中宮の御前の景観である。造営当初から「秋の野を遥かに作りたる」（「少女」巻）と述べられていた庭は「春の山も忘られ」るまで、という。

④　秋ごろ、西の渡殿の前、中の塀の東の際を、おしなべて野に造らせたまへり。閼伽の棚などして、その方にしなさせたまへる御しつらひなど、いとなまめきたり。（中略）この野に虫ども放たせたまひて、風すこし涼しくなりゆく夕暮に渡りたまひつつ、虫の音を聞きたまふやうにて、なほ思ひ離れぬさまを聞こえ悩ましたまへば、例の御心はあるまじきことにこそはあなれと、ひとへにむつかしきことに思ひきこえたまへり。　（「鈴虫」巻）

源氏は「秋ごろ」出家した女三宮が住む六条院の寝殿の西面近くを「野に造らせ」た。そこには色々な秋の花が咲き乱れている景色が広がっている。「前栽掘り」が行われたのである。「この（造らせた）野に虫ども放たせ」「虫の音」を聞くことは順

当な為事である。夕暮れの秋の野辺の〈有興〉の世界である。少し場面を進めよう。

⑤　十五夜の夕暮に、仏の御前に宮おはして、端近うながめたまひつつ念誦したまふ。（中略）例の渡りたまひて、（源氏）「虫の音いとしげう乱るる夕かな」とて、我も忍びてうち誦じたまふ阿弥陀の大呪いと尊くほのぼの聞こゆ。げに声々聞こえたる中に、鈴虫のふり出でたるほど、はなやかにをかし。（源氏）「秋の虫の声いづれとなき中に、松虫なんすぐれたるとて、中宮の、遥けき野辺を分けていとわざと尋ねとりつつ放たせたまへる、しるく鳴き伝ふるこそ少なかなれ。名には違ひて、命のほどはかなき虫にぞあるべき。心にまかせて、人聞かぬ奥山、遥けき野の松原に声惜しまぬも、いと隔て心ある虫になんありける。鈴虫は心やすく、いまめいたるこそらうたけれ」などのたまへば、宮、（女三宮）おほかたの秋をばうしと知りにしをふり棄てがたき鈴虫の声

と忍びやかにのたまふ、いとなまめいて、あてにおほどかなり。（源氏）「いかにとかや。いで思ひのほかなる御言にこそ」とて、

（源氏）心もて草のやどりをいとへどもなほ鈴虫の声ぞふりせぬ

など聞こえたまひて、琴の御琴召して、めづらしく弾きたまふ。（同）

ここで、この場面の虫の鳴く描写について付言しておく。（虫の声を扱う点では次節で述べるべきだが、場面の展開上、以下に記した。）

念誦する女三宮の傍近く虫が鳴いており、冒頭に述べた実資の念誦堂の記事が思い起こされる。これまでになかった秋の情景である。

鈴虫の鳴き声を「はなやかにをかし」（傍線㋐）と述べ、松虫と対比して「心やすく、いまめいたる」（傍線㋒）と表現していることは、「拾遺集時代に人気の急上昇した文学素材」[13]ゆえであろう。

「中宮の、遥けき野辺を分けていとわざと尋ねとりつつ放たせたまへる」（傍線㋑）は先の「薄雲」巻（引用①）と連なる表現であるが、ここでは「松虫」を中宮の好みとする。

続く女三宮と源氏の歌を、萩谷朴は「實資家歌合の鈴蟲の歌と、深い相似點を有してゐる」として、先行作品を指摘した[14]。

その出所は「永延二年七月七日蔵人頭実資歌合」[15]で、

蔵人頭家歌合永延二年

七月七日、頭殿の御前にて、男女方わきて歌合せさせ給ふ。鈴虫を題にて。

という歌合日記をもつ。この歌合には五番左右十首の歌がよまれている。その二番左、行頼の歌、

おもひやる星合の空の心にもふりすてがたき鈴虫の声

の四五句と、女三宮の歌の四五句（傍線㋓）とは全く形を同じくし、三番右の衛門君の歌

織女（たなばた）に心をよせて明かす夜も聞き捨てがたき鈴虫の声

の四五句も同趣であるとする。また三番左、友範朝臣の歌、

彦星によそへてぞ聞く年ふれどなほめづらしき鈴虫の声

五番右、右近の君の歌、

天の川星合の空をみるほどもなほわすられぬ鈴虫の声

の二首は、上の句と下の句の掛り方受け方や、接続詞「なほ」の用法などにおいて、源氏の歌（傍線㋔）と共通点をもつ、という。

萩谷の考察は、こうした歌の表現方法のほかにも小野宮家と紫式部との関係性など外部条件にも及んでおり歌合の十首の歌と併せて読むと興味深い。

自然の中にあっては小さな生物の鈴虫であるが、その声は多様な背景とともに人の心を動かし、言葉を生み出させたのである。

以上のように様々な前栽掘り[16]が見られるが、基本的には野に生えている植物の風情ありそうなものを掘り採って植えるというものである。①に「春の花の木をも植ゑわたし、秋の草をも掘り移して」とあるとおりである。移植して、その家に合う状況にして見せることを前提にする。現在の築庭に直截に及ぶものではないにしても④「秋ごろ西の渡殿の前、中の塀の東の際を、おしなべて野に造らせたまへり」などと「野」があり、「庭

園で、築山に続く穏やかな起伏の部分」（『岩波古語辞典』）と説明されるように、現在の作庭に通じる側面もあるかもしれない。

また前栽掘りは、意匠をもって想定の庭を作ろうとしたとき、見どころのある植物を掘り採るということである。その意図が明晰でなければ、前栽掘りは意味をなさないが、掘り採りの場所としては、嵯峨野が好適であったようだ。ⓐ『御堂関白記』に「嵯峨に出でて前栽を掘る」、ⓑ『小右記』に「嵯峨野に向かひ、前栽を掘る」などとある。「掘り採り」「寄せ集める」ということは、時代なり個別の趣向、好みといったものがあり、具体的な場においてはそれらが基本として働いたであろう。作庭の初歩的なありようも充分考えられる。

しかし、いずれにしても前栽の意匠も含め、天然自然に存在するものではない。誰かが何らかの意匠を念頭に、前栽掘りを行うわけである。天然自然に揃っているわけではなく、意匠の発案者が何かと何かを組み合わせ、そこに一定の世界を組み立てなければならない。既にあるのではなく、新たにそこに組み立て、かつ意味を付与するわけで、前栽掘りには〈作為的〉な「自然と人工との調和」が求められていたのである。

三、源氏物語の「おと・こゑ」

「虫の捕獲」も「前栽掘り」も『源氏物語』に至り常識として捉えられるようになった。庭（前栽）を構築するときの素材として当たり前と思われるようになった。また作為的な「自然と人工との調和」において当然なことと受け入れられるようになった。すなわち〈作庭概念〉の成立であり、それが深く関わっていると思われる。『作庭記』（平安時代後期、橘俊綱作とされる）には平安時代に展開した日本独特の作庭法が池、遣水、立石などについて詳しく具体的に書かれている。

〈作庭技術〉の出現、新しい感性の出現によって庭（前栽）は造られる。天然自然の造形は、いかに奇々怪々に見え独創的に見えても、それは庭とはいえない。単なる風景・景観に過ぎない。庭園は人が構想したもので、その人における統一された世界の結果がそこに現れる。ただその素材は自然天然のものであり、造形（人の思想も含めて）であった。自然の景観を人工的に再構成した日本の空間造形―。景観の引用。住居の周囲に樹木、石を配置し泉池を現出させる。時代の変化とともに名所の景色が模造されるようになる。―池・橋・築山などが造られ

る。

以上をふまえ、『源氏物語』の「おと・こゑ」に関わる諸事を点検してみたい。

㈠ 楽の音に混じる虫の声

前栽掘りによって設えられた前栽は秋の虫のすみかとなる。そこで鳴く虫の声を人はさまざまにめでる。次の（㋑㋺）は「楽の音に混じる」虫の声の描写である。

㋑（源氏）「かやうのことは御心に入らぬ筋にやと、月ごろ思ひおとしきこえけるかな。秋の夜の月影涼しきほど、いと奥深くはあらで、虫の声に搔き鳴らし合はせたるほど、けー近くいまめかしき物の音なり。……」（「常夏」巻）

前節①の引用に続く場面である。玉鬘が調律した和琴の音色から、源氏の話は和琴論へと展開している。源氏は、虫の声に調和して搔き鳴らす和琴の音色が親しみやすく今めかしい、といっている。

㋺（源氏）「心もとなしや、春の朧月夜よ。秋のあはれ、はた、かうやうなる物の音に、虫の声よりあはせたる、ただならー ず、こよなく響きそふ心地すかし」とのたまへば、（「若菜」下巻）

人間の音楽の音色に虫の声が「こよなく響きそ」って聞こえるのは言いようもない秋の風情を感じさせる、という源氏の弁である。

㋩ 弁少将拍子うち出でて、忍びやかにうたふ声、鈴虫にまがー ひたり。（「篝火」巻）

人の声が虫の音に「まが」えられている例である。初秋の六条院の東北（丑寅）の町の西の対に、源中将（夕霧）、頭中将（柏木）とともにやってきた弁少将（内大臣の二男、柏木の弟）が忍びやかにうたう声は鈴虫と聞きまちがえるほどの美声である、という。弁少将は「八つ、九つ」のころ声が「いとおもしろく」、催馬楽「高砂」を謡う姿が「いとうつくし」と述べられていた（「賢木」巻）。虫の声と音楽や人の声との調和を描いている点に先ず注目しておきたい。

㈡ かれがれなる虫の声

つぎに「悲愁を誘う」虫の声の例を引く。

㈡ はるけき野辺を分け入りたまふよりいとものあはれなり。（中略）浅茅が原もかれがれなる虫の音に、松風すごく吹きあはせて、そのこととも聞きわかれぬほどに、物の音ども絶え絶え聞こえたる、いと艶なり。（「賢木」巻）

源氏が野の宮にいる六条御息所を訪問する途中の描写で、玉上琢彌によって音楽的文章と指摘された記述（『源氏物語評釈』）である。枯れ枯れの浅茅が原、嗄れ嗄れの虫の音に風が松の梢を吹きわたる。「絶え絶え」に耳に届く物の音に、――人工と自然の調和を描いて、源氏の心細い思いがみごとに彫琢されている。

㈩ 風いと冷やかに吹きて、松虫の鳴きからしたる声も、をり知り顔なるを（同）

源氏と御息所との別れを前に、冷やかに吹く風と鳴きからした松虫の声が、心の乱れをおこさせる。御息所の歌「おほかたの秋の別れもかなしきに鳴く音な添へそ野辺の松虫」とともに哀感に満ちた虫の声である。

㈢ 鳴き弱る虫

「かれがれなる虫の音」などに加えて「鳴き弱る虫」について触れるが、その前に、まず夕霧が柏木の没後、「四月（うづき）ばかり」の新緑に囲まれた一条宮邸を訪れたときの描写を引く。

㈠ 例の、渡りたまへり。（中略）ここかしこの砂子薄き物の隠れの方に、蓬も所得顔なり。前栽に心入れてつくろひたまひしも、心にまかせて茂りあひ、一叢薄（ひとむらすすき）もたのもしげにひろごりて、虫の音添へむ秋思ひやらるるより、いとものあはれに露けくて、分け入りたまふ。（「柏木」巻）

所得顔の蓬、生え広がる一叢薄が、主を亡くした庭園の荒れてゆくさまを語っているが、いまは初夏であるのに、ことさら強調するかのように「虫の音添へむ秋思ひやらるる」と述べている。

翌年の秋に訪れてみると、荒れた感じはするものの、さすがに上品に気高い住まいで、前栽の花々が「虫の音しげき野辺」

（「横笛」巻）の趣に咲き乱れていた。夕霧が一条御息所から柏木遺愛の笛を贈られ、邸を立ち去ろうとするとき、御息所は「露しげきむぐらの宿にいにしへの秋にかはらぬ虫の声かな」と詠んだ。その住まいは「虫の声」と切り離せないのではないか、と思われる。

㋣　風いと心細う更けゆく夜のけしき、虫の音も鹿のなく音も、滝の音も、ひとつに乱れて艶なるほどなれば（「夕霧」巻）

落葉の宮、母一条御息所が小野の山荘に移り住んだ後、夕霧が胸のうちを訴えるも落葉の宮は心を閉ざし、時間が過ぎてゆくが、風がさびしく吹き、虫の音、鹿の鳴く声、滝の音が一つに混じりあう、と、ここでも聴覚に訴える描写が繰り返される。

落葉の宮から「明かさでだに―せめて夜の明けないうちにお帰りを」と懇願されるまで山荘にとどまってしまった夕霧であるが、このことが祈祷の律師の誤解を招く。律師から話を聞いた御息所は落胆し、夕霧の真意もつかめぬまま、悲嘆のあまり病が急変し死去してしまう。夕霧は御息所の葬儀に力を貸し、その後も落葉の宮を慰問するために小野へと向かう。

「九月十余日」ともなれば秋も深まり、ものの風情をわきまえぬ人でさえ心を動かさずにはいられない野山の景色である、と作者は述べる。木々の葉は落ち、読経の声がかすかに聞こえるが、人の気配はほとんどない。そうした中に滝の音が響き、かろうじて虫が鳴いている。

㋒　滝の声は、いとどもの思ふ人を驚かし顔に耳かしがましうとどろき響く。草むらの虫のみぞよりどころなげに鳴き弱りて、枯れたる草の下より竜胆（りんだう）のわれ独りのみ心長う這ひ出でて露けく見ゆるなど、（中略）をりから所がらにや、いとたへがたきほどのもの悲しさなり。（同）

滝の大きな音と対照的に虫の声は小さい。二重傍線部の「虫」は「草が枯れて隠れ場所がない虫の姿は、頼るべき人がなくなった落葉の宮の象徴」と見られている（引用書頭注四）。なるほど、季節の進行とともに虫の声が「鳴き弱（17）り」、ついには季の終末に至ることを知っている者は、それが落葉の宮の心細さを語るものであることを容易に理解できる。

四月の景色の中で、夕霧は秋の虫に思いを馳せていた（引用㋑）。この叙述は、小野での落葉の宮の境遇を印象づける「鳴き弱る虫」を描出するために用意されていたのではないだろう

か。だが「鳴き弱る虫」も、ついには鳴かなくなる。季節は冬、夕霧は御息所の四十九日の法要を取りしきる。落葉の宮は小野の山里で一生を過ごそうと決心するが、父朱雀院の諫めもあり、思いとどまる。一方、夕霧は宮が京の一条邸に移る日を、その日、と決めて御息所の甥の大和守に移徙にともなう作法を命じ、邸の内外を整えさせるなど宮を迎える準備を急ぐ。そして、いよいよ落葉の宮が夕霧の待つ一条邸に帰る日は時雨が降っていた。

草むらの虫が「よりどころなげに鳴き弱」った先に落葉の宮を待っていたのは、夕霧の思いを受け入れるしか生きるすべのない新たな現実であった。

時には楽の音や人の声と調和して風雅を添える虫、人の心を悲愁へと誘う虫、心細さをいや増す虫を作者は描いた。小野における霧が単なる風景描写に留まらない[18]ように、小さな虫の存在とその声も、物語に重大な意味を持つものであることを知るべきであろう。

結語

虫を放ち、前栽掘りをしてまで自然と人工との調和を期してきた平安貴族であるがそれは結局自然を改変することに他ならなかった。虫がいないなら「執松虫・鈴虫、放蓼堂之路邊叢中」とし、「其聲有興」と楽しむ。前栽が整わないなら「殿上人出嵯峨、掘前栽、獻皇太后宮」として奉仕する。つまり、現にないなら、それを作為的にでも調える。のちの〈作庭の思想〉に他ならない。それほど調和（つきづきしさ）の思想を尊重した時代に、無粋というべきか、破天荒な女房のいたことを報告して稿を閉じる。

『十訓抄』第一―五六「皇嘉門院の女房虫の鳴く聲を問ふ事」（国史大系本の見出し）である。

同院（皇嘉門院）、年経、世変りてのち、秋の夕暮に、端近く出でさせ給ひて、前栽御覧ぜられけるに、古を思ひ出でて、「三条殿に、虫の鳴きしこそ」と、仰せ出されたりければ、人々静まりて、あはれに思ひあへりけるに、右大弁と聞ゆる人、御前に候ひけるが、「いかに鳴き候ひけるぞ」と申したりければ、「いい、とこそは」と仰せられけるに、ことさめて、御前なる人、わらひけり。

申しがたきことを、申したる女房なり。

（本文は新編・日本古典文学全集）

秋の夕暮れ、皇嘉門院[19]は九条殿の前栽を眺めつつ、崇徳天皇とともに在った三条殿の庭で虫が鳴いていたことを想い出した。そのことを口にすると女房たちも互いにしんみりと思い、静まるのだった。すると右大弁という女房が「どんな声で鳴いていたのですか」と尋ねた。場違いな右大弁の質問であったが、女院は「いい、とこそは（リーリーと鳴いたのですよ）」と答えた。院は三条殿での懐かしい思い出に浸ると同時に、保元の乱で讃岐に配流になった崇徳上皇のことや、変転する世の中に思いを廻らしていたかもしれない。その静まるべき場に発せられた「いかに鳴き候ひけるぞ」という破調の一言によって「わらひ」が起こり、それまでの「あはれ」の世界は覆されてしまった。黙することが共感の表明であるはずのこの場で、右大弁は調和を破ったのである。

冒頭で人工と自然との調和こそが平安貴族の求めた美学である旨を述べたが、人と人との交わりにおいても調和を重んじなければならないことを気づかせる「虫の音」であった。

〈注〉

（1）念誦堂完成までの経緯については太田静六「右大臣藤原実資の邸宅・小野宮」（『寝殿造の研究』　吉川弘文館　一九八七年）に詳しい。ここには治安三年五月以降、人々が訪れたことを示す記事と、細部が調えられ、完成に近づいている様を示す記事を引く。

①五月五日、丁卯、…（右頭中将公成）欲見念誦堂者、相引令見、感歎無極、

②　十日、壬申、…左頭中将（源朝臣）来堂、先仰勅命、後見風流、感歎無極、

③　三十日、壬辰、廣業（藤原）相公無指事来、爰知見念誦堂、相伴向堂、廻見云、可謂二伽藍一、非流俗處、二町之内深山絶域、更不知之、還以可奇、数度感歎、所陳多々、…

④六月十九日、辛亥、宰相（資平）来、法性寺座主慶命僧都来語、欲見小堂者、仍相伴令見、宰相令従、僧都感歎無極、…

⑤七月三日、乙丑、…禪林寺僧（源雅通）正被示送云、大僧（源雅通）正相具今月廿日比蜜［々可見念誦］堂、報云、聊結構未了其功、此間光臨極可無［便歟］、九月間僅可了也、…

（［　］内は欠損文字表記。以下同じ）

⑥　八日、庚午、廿日比兩僧（源信・源覚）正有可来見念誦堂之御消息、而未造畢之間可無便［由令］申達禪林寺僧正了、即有返報、…

⑦八月四日、乙未、…今日以左兵衛志良（藤原）親令畫堂東廊布障子、

⑧　十一日、壬寅、今朝初於堂食強飯・粥等、宰相并資高朝臣預食、於堂躬自念誦・讀經、

⑨　十六日、丁未、…以外記祐頼令書堂廊半蔀銘、〈三間、書万春樂〉伯耆守資頼志雑物等、（中略）小女（千古）乘檳榔毛車晩景渡堂見之、聊令儲食、又女房方弁備細檳破子出、男等方伯州爲上首、

（*伯州…伯耆守資頼）

①②④の傍線部「感歎無極」が印象的である。

（2）治安三年八月二十三日条と野筋との関わりについては田中正大『日本の庭園』（鹿島出版会　一九六七年）に指摘がある。

（3）平野由紀子校注。（犬養廉・後藤祥子・平野由紀子校注『平安私家集』新日本古典文学大系所収　岩波書店　一九九四年　三四頁）

（4）注（3）脚注口語訳

（5）後藤祥子校注。（注（3）と同書。二八七頁）

（6）延長二年（九二四）生。実頼二男。母は藤原時平女。

（7）注（5）脚注口語訳

（8）竹鼻績『公任集註釈』一二二頁補説。（貴重本刊行会　二〇〇四年）

（9）『古今著聞集』は「嘉保二年八月、殿上人嵯峨野に虫を尋ぬる事」（巻第二十「魚虫禽獣」）の題でこの日の話を載せる。虫籠が「むらごの糸にてかけたる虫の籠」とあること、蔵人弁時範が馬上で題を奉ったこと（題「野径に虫を尋ぬ」）、虫は「野中にいたりて、僮僕をちらしてとらせ」たこと、「十余町ばかりは、おのおの馬よりおり、歩行せられ」たとあるなど違いを見せるが、合わせて読むべきであろう。

（10）注（8）前掲書一二九頁補説。『権記』の用例「寛仁元年八月二十一日条」については『権記二・帥記』（増補史料大成五　臨川書店　一九六五年）の『権記〈補遺〉』に拠る。

（11）飯塚ひろみ「歌ことば「女郎花」考―その「移動」と「前栽掘り」、そして「歌合」との関係―」（『日本語日本文学』第十八号　同志社女子大学日本語日本文学会　二〇〇六年六月）

（12）『中右記』嘉保二年八月二十八日条に、白河上皇の鳥羽殿で行われた前栽合のことが詳述されているが、「上皇御瘧病之間強有此興、世人不甘心歟」とある。すでに二十五日条に「今日上皇御瘧病令發御云々」、二十七日条に「上皇又令發御云々」と見えており、御悩（瘧病）であるにも拘わらず強行されたことに世人は感心しなかった。なお、この前栽合でも虫を捕って進上したことが「右方取虫入小籠進、頗有逸興」と記されており、『古今著聞集』「嘉保二年八月、白河上皇鳥羽殿にして前栽合せの事」（巻十九「草木」）には「右方、虫を籠に入れて二籠奉りたりけり。その籠にも歌をつけたり。虫の声も聞に入りて、いと興ある事なりけり」と見える。

（13）『公任集』脚注。注（3）と同書。

（14）萩谷朴「紫式部と鈴虫と小野宮實資」『国語と国文学』三十三巻七号　東京大学国語国文学会　一九五六年七月

（15）萩谷朴編著『平安朝歌合大成』（第二巻）同朋舎　一九七九年復刊第一刷

（16）「前栽掘り」の例を『伊勢集』『公任集』から引く。

①　ささきの御心、かぎりなくなまめきて、世にたとへむかたなくなむおはしましける。この人（伊勢）、曹司に、前栽をかしう植ゑてなむ住みけるを、秋、里にまかりいでたりけるに、（后宮　温子）「などか今までは参らぬ。おそく参るめれば、曹司の松虫もなき止み、花ざかりもすぎぬべし」とのたまはせたれば、御かへりにきこえさする

二八　松虫も鳴きやみぬなる秋の野に誰（たれ）呼ぶとてか花見にも来む

（『伊勢集』）

②　中宮の御前に前栽植ゑさせ給ふ日、秋の花を植うといふ題を

一〇四　松虫の音をたづねてや掘りつらんのどけく見ゆる秋の花かな

（『公任集』）

「中宮」は公任の姉、円融天皇の中宮遵子（天徳元年〈九五七〉～寛仁元年〈一〇一七〉。天元五年（九八二）三月十一日中宮。正暦元年（九九〇）十月五日皇后となるまでの間「中宮」）。公任らも中宮のために嵯峨野へ前栽を掘りに出かけたのであろう。「秋の花を植う」という題で詠歌があるところから、相応の人数が考えられる。『公任集』

には「女郎花ほりていく所の有けるを…」（八八番歌詞書）も見える。遡って『在中将集』の「きさいの宮の菊めしけるに、ほりてたてまつるとて（詞書）」「植ゑしうゑば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯れめや」が『古今和歌集』巻第五秋歌下、『大和物語』一六三段、『伊勢物語』五十一段に受け継がれている。『伊勢物語』では、「昔、男、人の前栽に菊うゑけるに」とあり、頼まれて人の前栽に長寿を象徴する菊を植え、その挨拶として慶賀の気持ちを歌にしている。道長等による皇太后彰子のための催し以前に「前栽掘り」が盛んに行われていたことが考えられる。

(17) 『紫式部集』（新潮日本古典集成）の冒頭「めぐりあひて見しやそれともわかぬまに雲がくれにしよはの月かな」に続く二番歌を引く。

その人、とほき所へいくなりけり。秋の果つる日きて、あかつきに虫の声あはれなり。

鳴きよわるまがきの虫もとめがたき秋の別れやかなしかるらむ

（『千載和歌集』巻第七「離別」にも載る）

幼な友達だった人との別れを詠んだ娘時代の歌に見える「鳴き弱る虫」である。また三首めの「露しげきよもぎが中の虫の音をおぼろけにてや人の尋ねむ」にも「虫の声・虫の音」がある。「虫の声・虫の音」は紫式部が意欲的に物語に取り入れた素材と思われる。同時代の歌には「鳴き弱る虫」は多くない。目を引く二首をあげる。

ある山てらにて、むしのこゑごゑになくをきゝて

六四　なきよはるむしのこゑごゑきくときはちゝにものこそかなしかりけれ

（『道信朝臣集』）

二三　秋風にこゑよはり行くすゝむしのつゑにはいかにならむとすらむ

（『匡衡集』・『後拾遺和歌集』巻第四「秋歌上」）

八代集にはあまり見られない「鳴き弱る虫」も、のち『玉葉和歌集』（正和元年〈一三一二〉成立）の「秋歌下」にはほぼ連続して見える（八一〇～一四、八一九）など多く詠まれるようになる。すでに源俊頼の『散木奇歌集』（大治三年〈一一二八〉頃成立）には「鳴き弱る虫」を素材としている歌（四二七・四二八）があるが、ここでは四二六番歌を引いておく。

虫為二夜友一

秋のよを誰とゝもにやあかすらん虫の音きかぬ人にとはばや

（第三　秋部）

詞書のように、虫を、長い夜を明かす友として詠んでいる。『古今和歌集』の「秋の野に人松虫の声すなり我かとゆきていざとぶらはむ（秋歌・上二〇二）」に見られるような「松・待つ」という修辞上の要請から離れた「心の友となり得る虫」のように、時代の下降とともに素材としての「虫」の捉え方に変化が見られる。

(18) 上坂信男「小野の霧・宇治の霧―源氏物語心象研究断章―」は「夕霧」巻に用いられる霧の象徴的意味を論じている（『源氏物語Ⅰ』日本文学研究資料叢書　有精堂一九六九年）。引用書（新編・日本古典文学全集四）頭注三一は「この巻の、夕霧が落葉の宮を訪問する場面に「霧」を配する自然描写が顕著である。「霧」は、人の理性・分別をとりこめ、かつ見境のない煩悩の象徴として立ち現れる」とする。

(19) 藤原聖子　父は摂政関白、藤原忠通、母は権大納言藤原宗通の女宗子。保安三年（一一二二）～養和元年（一一八一）。大治四年（一一二九）入内（時に八歳。保安四年二月、五歳で即位した崇徳天皇は一一歳）。同五年中宮。久安六年（一一四一）院号宣下、皇嘉門院と号す。

〈付記〉

『源氏物語』「蛍」巻において、ホタルの光で几帳の傍らにいる玉鬘の姿が照らし出される場面も同断であるが、いまは措く。